



OSCN 交通安全対談シリーズ ^わすてきな輪だち！

自転車をはじめ、さまざまな形態で交通安全教育に携わる方々をお招きし
「乗りもの文化」の未来を語り合います。

第6回 「思いやりの心を育む交通安全教育」 (一財) 長野県交通安全教育支援センターの交通安全教育



(左から) 支援センター／熊谷猛彦 理事長

OSCN 顧問 宮澤雅法 (中塩田小校長)

支援センター／宮澤まゆみ 事業部主任

OSCN 研究所 所長／片山 昇 (中塩田小教員)

ゲスト講師 理事長 熊谷 猛彦
事業部主任 宮澤 まゆみ



対談中のセンター職員と OSCN 宮澤顧問



聞き手：OSCN顧問 宮澤雅法
まとめ：OSCN所長 片山 昇
対談日：2025年12月26日
場 所：長野県交通安全教育支援センター
(長野市)

OSCN 所長 片山：

今日は、長野市の一般財団法人 長野県交通安全教育支援センター様をお伺いして、交通安全教育の方向性や内容についての貴重なお話をお伺いできればと思います。

また、今回の対談では、OSCN 顧問研究員の上田市立中塩田小学校の宮澤雅法校長に質問者／聞き手として同席させて頂きました。

理事長 熊谷猛彦様、そして、事業部主任 宮澤まゆみ様、年末のお忙しい中、よろしくお願いします。

長野県交通安全教育支援センターの誕生

OSCN 所長 片山：

まずは、どのような経緯で、長野県全域をカバーする交通安全教育に特化したセンターが誕生したのか興味深いところです。県内全域を網羅する交通安全教育機関は、現状の日本では他に例を見ない取り組みだと思います。以前から、センター様の教育活動の存在意義を感じておりました。

ぜひ、その辺りの経緯からお伺いできればと思います。

センター熊谷理事長：

私ども一般財団法人長野県交通安全教育支援センターは、平成 14 年 4 月に財団法人として発足し、平成 20 年 12 月、公益法人制度改革関連三法が施行されたことに伴い、平成 24 年 4 月、長野県知事の認可を受けて、一般財団法人に移行した団体で、今年で教育活動が、24 年目となります。

当支援センターでは財団法人として発足した平成 14 年 4 月以降、交通事故のない社会の実現を目指し、県民の交通安全意識の普及高揚、飲酒運転の防止、シートベルトの全席着用とチャイルドシートの正しい使用の徹底、自動車安全利用に関するルールとマナーの周知等を図るため、幼児・児童、その保護者、高齢者等の年齢層に応じ、かつ地域の交通実態を踏まえた体験・実践型の交通安全教育活動を行っています。また、関係機関・団体とも連携して各種交通安全啓発事業にも積極的に取り組んでいます。

相手を思いやる心を育む教育の大切さ

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

長野県内の学校教育現場は、様々な形でこれまで支援センター様から講習をして頂いていると思いますが、教育活動上で大切になさっておられる点はどのような点でしょうか？

センター事業部主任 宮澤：

当支援センターは、交通事故のない「安全で安心な長野県づくり」に向け、様々な活動を推進してまいりました。特に、「思いやりの心を学ぶ」という点を交通安全教育の中心に据えております。

つまり、自分の安全のみならず他の人々にも思いやりを持った行動が出来るように学んでもらうことが、交通安全指導上とても大切だという信念をもって、職員一同が指導にあたっています。

具体的には、受講者の方々が参加、体験しながら交通ルールが学べるようにしています。例えば、校庭模擬コースによる、安全な歩行や自転車乗り方の実技指導や、地域性、交通事情などを

踏まえながら指導内容を組み立て、講習を行っております。また、講習を申し込んで頂いた学校や地域社会の方々からの希望をお伺いしながらプログラムを立案することも大切にしています。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

「思いやりの心を育む安全教育」という教育指針とても大切なことだと共感します。
そして、貴センター様のホームページを拝見しますと、スローガンとして「歩行者と運転者 目と目で交わす 思いやり」といった標語が掲載されておられます。自動車や自転車、オートバイなどのたくさんの乗り物があふれている日本社会の中で、相手のことを考える姿勢「思いやる心」の存在がとても大切だと私も思います。

さて、日々、小学校の校長の立場から、交通社会での児童の様子を視ておりますと、たまたま事故が起きないで済んだということが沢山あるように感じています。登下校時に、歩道と車道とを仕切る縁石の上を遊びながら歩いてしまう児童生徒を目にしたり、小学校周辺でヘルメットをかぶらずに自転車に乗っている児童を目にしたりすれば、その場でも声がけするし、また、その子が誰か分かれば担任を通じて指導してもらうようなこともあります。

今後、どの様な指導が効果的なのかと常日頃考えています。この対談で、長野県全域を対象に交通安全教育の指導を、2002年から23年間にわたり長年実施されておられるセンターの方々から、交通安全教育の指導方法などについて、学ばせて頂けたらと思います。宜しくお願い致します。

センター熊谷理事長：

中塩田小学校さんでは、これまでどのような交通安全教育の取り組みをしてこられたのですか？

交通安全教育に欠かせない地域の力

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

安協や警察の方に来て頂いたり、自動車販売店協会さんの交通安全教育担当者の方にお越し頂いたりしています。内容は、それぞれ特徴がありますが、低学年であれば紙芝居などで楽しく人形などで交通安全のポイントをお伝えくださったり、自転車の乗り方の模範デモンストレーションを見せて頂いたり、又、或いは、1年生や2年生向けの低学年の安全歩行訓練として、学校の周囲の横断歩道や交差点などで、実際に教員や安協の方々と児童が各グループで歩いて危険箇所を確認しながら、安全確認動作を身に付けてもらうようにしています。

或いは、学校の校庭に模擬道路を作って自転車の乗り方を安協の方と一緒に指導したり、DVDを見たりといった指導に取り組んでおります。

ただし、授業時数の関係もあり、様々な内容や教科が増える中で、以前ほど交通安全教育に取り組む時間が減少傾向にある状況があります。本校は、幸いにして、実地訓練が行える状況できていますが、学校によってはDVDだけを児童が見て学習するだけの形態に移行しつつあるところも増えてきているようにも感じています。今後その状況に不安を感じる面もあります。というのは、幸いに事故が起きていない状況が続けば続くほど、交通社会での児童の安全確保に関して、教育の重要性への危機感が現場で低下する怖さがあるように感じております。その結果、学校の中で、DVDだけで済ませようという傾向や交通安全教育の講師をお呼びしてお話を聞かせるだけで済ませてしまうというような傾向に移行していく状況が生じる可能性が有ることに対して、正直不安を感じています。

センター熊谷理事長：

私が3、4年前に、県内警察署で署長をしていた時のことですが、

私が着任するかなり前に管内の中学校の生徒さんが交通事故で亡くなられて、それをきっかけに、再びこのようなことが起きないように、そのクラスの生徒さん方が、授業前にその交差点に立って安全活動を開始したようなことがありました。その後輩の方々も、その安全活動を引き継ぎ、継続して長く続けている学校もあります。

不幸な事故をきっかけに、生徒たちが中心となって安全活動の伝統が継続されている例です。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

本校も、地域の方々が、校区の危険な場所等での安全活動や立哨活動を、とても積極的に自主的にお進めいただけてくださいます。学校からこの場所の立哨活動をお願いしますと依頼している訳ではありません。毎朝、地域の10人くらいの方々が自主的に旗をもって安全見守り活動をして下さっております。児童が当校する横断箇所などで、運転手さんに対する安全運手の啓発効果も高まっており日々の効果が高いなど日々感謝しています。つくづく、地域社会全体で児童を見守るという部分で、地域の方々のお力の大きさを痛感しています。

センター熊谷理事長：

私も、長年、警察で仕事をしてきた中で、地域の方々が自主的に自発的に、見守り活動等を継続して行って下さるのを常に感じてきたわけですが、地域の安全を守るという点で、地域の方々のボランティア活動をととても力強いものとして感じてきたところです。

地域的な課題「踏切事故を防ぐ教育の大切さ」

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

先ほど熊谷理事長が中学生の死亡事故のお話をして下さいましたが、私も、約30年前の教員なりたての頃に、小学3年生を担任していた際に、となりのクラスの元気の良い男の子が夏休みの終わる直前に自転車乗車中の交通事故で亡くなるという悲しい出来事を経験しました。

当団体の片山所長も、中塩田小学校の地域的な交通特徴を心配しているところですが、本校の校区には遮断機の無い踏切がございます。先ほどの小3児童は、同様の遮断機の無い踏切での事故でした。自転車で坂道を下ってきたところにあった遮断機の無い踏切で、車は通行不可ですが、自転車は通行できるような踏切に、自分の自転車では無い借り物の大きめの自転車でブレーキもきかせられずに進入してしまい、ちょうど通過する電車と衝突したという状況でした。当時は、安全面でのヘルメットをかぶるような社会傾向もルールも無く、ノーヘル状態で電車と衝突し亡くなってしまいました。お子さんがお1人のご家庭で、そのときのご家族の悲しみに触れ、とてもショックが大きかったです。その悲しい出来事以来、さまざまな機会に、歩行も自転車乗車時も交通安全の指導や啓発を大切にするという思いが消えることはありません。このような痛ましい事故を、二度と起こさせないという思いで、児童にも語りかけることがあります。子どもたちは、とても真剣に聞いてくれており、響いてくれていることを願って、様々な機会に伝えております。

いまだにつくづく、後悔してもしきれない出来事です。

遮断機の無い踏切を、止まらずにサアッつと自転車で通過してしまう状況が、そのお子さんにとっては、もしかしたら日常だったかもしれません。その何回目かの、たった一瞬の出来事で、大切な命を落としてしまうことになる。本校でも、もしかしたら、たまたま運よく大事故に至らなかったという状況が、日々発生しているのではないかと不安になります。

OSCN 所長 片山：

最近も、日本の遮断機の無い第三や第四踏切と呼ばれる単線の踏切で、小学生が自転車乗車状態で電車と衝突し、亡くなる事故が数件発生していますよね。先ほど、宮澤校長も述べられたように、中塩田小学校の校区には、別所線にかかる第三踏切が数か所あります。結構多いのです。

私が自転車で走っていると、地域の小学生が、そういった踏切を、友達を追いかけるようにして、渡る前に止まらずに、そして、自転車から降りて押し歩きせずにパーッと通り過ぎた光景を目にしたこともあり、これは、踏切の安全横断の指導も不可欠だと痛感しているところです。

先ほどの宮澤校長のお話にもありましたが、何かあってからでは遅い、日々、大事故の可能性は発生していると認識を強めて指導や声がけしなければ、取り返しのつかないことになる。

比較的、長野県全域には、このような遮断機の無い第三や第四踏切は多いのでしょうか？

センター事業部主任 宮澤：

ありますね。長野電鉄や JR さんも、遮断機の無い踏切をもっていますね。

塩尻でも、小学生が遮断機のある踏切で列車と衝突し亡くなるという事故も記憶に新しいところです。やはり、このような事故を防ぐために、私たちセンターも、JR さんと組んで安全な踏切の横断の仕方などの指導を取り入れています。いろいろな状況で、踏切での事故は発生する訳ですが、二度とこのような事故を発生させない為にも、やはり、児童生徒に踏切横断する際の怖さを分かって欲しいと思います。



中塩田小の廊下に掲示されている上田電鉄作成の踏切事故防止の啓発ポスター



踏切だ 鳴らせ心の 警報機

OSCN 所長 片山：

大人でも、電車の本数が少ない単線の線路などで遮断機や警告音・信号機が無い場合、ついうっかりしてしまいそうになる怖さも有りますよね。これまでも、高齢者の方の農作業に向かう軽トラが、上田電鉄の別所線と衝突したという事例が聞いたことがあります。

センター事業部主任 宮澤：

そうなのです。まだ、車が通れるような第三踏切はともかく、まるで、遊歩道の延長のような歩行者や自転車だけが通れるような踏切もありますよね。

OSCN 所長 片山：

おっしゃる通りで、先ほど申し上げた最近発生した第三踏切での小学生の死亡事故も、まるで歩道の延長のような踏切でした。普段からその様な場所が危険だということが、児童の心の中でしっかりと認識できており、一度止まって安全確認して自転車から降りて押して安全に渡るような習慣が身についていないと、取り返しのつかない事故がいつ発生してもおかしくない。

私が20年程住んだ愛知県では、踏切の指導は、あまり焦点を当ててこなかった。完全に遮断機が降りて、電車と隔離状態になる踏切が多く、第三や第四踏切が少ないということも有りますが。

ただし、やはり、踏切横断時の指導は、その様な地域でも、児童生徒に必要なだと今は認識しています。その辺のご指導も、センターさんでも重要ポイントでしょうか？

センター事業部主任 宮澤：

そうですね。ただし、私どもが学校に指導授業をさせて頂く場合に、当然のことながら授業時間が限られておりますので、どんな交通安全に必要な内容を焦点化するかというのはその都度学校さんとの相談で決まります。もちろん、踏切横断時の安全というような内容を必要とする学校さんでは、ぜひその辺りにも触れてほしいと言われることも有ります。最近では、先ほどの事故の教訓をもとに、JR 長野さんや長野電鉄さんも、その辺りの啓発教育に力を入れておられますので、私どもも、各列車会社さんとコラボレーションで指導にあたる事がございます。例えば、模擬踏切を設置して、指導を行ったりします。私どもが授業時間中の8割、残りの2割を鉄道会社さんに担当して頂いたりします。安全な横断の仕方を実地で学んでもらうような指導機会を設けております。模擬踏切での実地トレーニングや車掌さんとの掛け合いでのクイズ形式での授業など、児童生徒が飽きないような工夫で取り組んでいます。

センターの私たちと同じように、各列車会社さんも、指導プログラムを考案されておられますので、そのプログラムに従った指導内容ということになります。また、子どもたちは、とても電車に対して、興味関心が高いお子さんが多いので、車両の名前を暗記しているお子さんなどいて、授業内容に集中して取り組んでくれる場面が多いです。

センター熊谷理事長：

踏切が近くにある小学校などで、通学登下校時に踏切を渡る状況があるということで、指導を依頼されたこともありますね。

そのほか、地域の子ども会などでの入学前（新学期前）の指導では実際の通学路を歩き、踏切などの渡り方の指導も行います。お子さんの事故は、朝よりも夕方の時間帯が多いので、登下校以外の放課後の時間帯などでの移動経路のご家庭や学校での指導確認も大切ですね。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

通学路は、基本的には遮断機の無い横断歩道を指定していることは無いと思うのですが、学校の登下校以外の日常で、第三踏切を通る児童もいるかもしれませんので引き続き注意して指導していきたいですね。

児童の登下校時の状況 横断時の交通行動

OSCN 所長 片山：

私が長年所属してきた愛知県の日進市の小学校の例ですと、集団登下校を通常行っている状況でしたので、比較的、通学路を守らないというような児童がいることは少ない状況でしたが、現在私が所属する上田市の中塩田小学校では、普段、集団登下校はしていない状況です。そういった状況下で第三踏切を含めて、危険性の高い道路を自分勝手に通ってしまう児童がいると危険ですね。

長野県内でも、昨年1年間に交通事故で命を落としたり、けがをしたりした児童は、約160名、その中の46名が登下校中の事故とのデータが県警から上がっています。やはり、登下校中の事故も全国同様多いですね。

センター事業部主任 宮澤：

集団登校の集合場所に行くまでの事故も見られますね。県内では、1年間を通じて集団登下校をする小学校も有り、一方で、春先だけのみ通学路の再確認という意味も含めて集団登下校をする学校さんも見られます。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

本校も、3月など限られた期間のみ、再確認や新1年生への教育という意味で、集団登下校をしていますね。

センター事業部主任 宮澤：

集団登校というと、交通の安全を補完するという目的以上に、低中学年をとりまとめる役割の高学年の班長副班長さんなどは、泣きたくなくらい結構精神的に負担もあるように伺ったことがあります、その辺りは、学校現場では如何でしょうか？

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

そうですね。班の中での友だち関係のもめごとなどがあると、安全な登校指導という目的が、生活指導や有事関係の指導に発展したりすることも多々あって、ご指摘の通りなかなか実は難しい問題もはらんでいるのが実状です。集合場所で、待っていても集合時間通りに来ない児童がいたり、班長さんなどの言うことを聞かない児童がいたり・・・と。

OSCN 所長 片山：

私も経験がありますが、集団登下校の班で、夏休み前や年度初め等に、各班での反省会や新1年生を含めた打合せ会などを授業時間内に実施すると、本来の目的であるはずの「道路や防犯上の危険などから身を守り安全に登下校する為の打合せ」が中心となるのではなく、どちらかというと、班の中での人間関係のもめごとの解消に終わったりすることが多かったですね。

本来は、このような機会を捉えて、街の中で安全に登下校するための交通安全上の反省や教員からの交通ルールなどの指導の機会であるべきだと思うのですが。

また、集団登下校を、毎日している児童によく見られる傾向が、長い列になって移動していくせいか、先頭の子ども以外はお話に夢中になり、道路横断時でも周囲をよく見ていないというような状況も多々見られます。こうなると、集団登下校そのものが、児童に日々よくない道路での交通行動を植え付けていると感じられることもあります。

ですので、集団登下校を平素はしないような小学校、現在、私が所属している中塩田小学校もそうですが、個人個人が分散登下校する学校の児童さんの方が、日々自分の目で安全を確保しないといけないという状況下にあるせいか、とても、周囲をよく見て安全確認をして交通行動を行っているという印象があります。中塩田小学校の教員になる数年前から、本校の子どもたちの道路横断時の安全確認等の交通行動には多々感心させられることが多かったですから。

「横断歩道の手前で着実に止まり、左右の安全を確認し、向かってくる車とアイコンタクトし、車が停止したことを確実に確認して、もう一度安全確認をして手を上げて渡る」。さらには、次の行動については、賛否両論あるところですが、児童が道路横断前後で、停止してくれた車両にお辞儀をしてお礼をする。私は、すばらしい交通行動の文化だし、社会全体で安全な交通行動を育む連鎖が伝統として継続されているなど感じているところです。

他県や他地域と比較すると、どうすればこのような交通行動が取れる児童が育つのだろうかと、長い間関心を募らせていました。

センター事業部主任 宮澤：

長野県の多くの地域で、そういった児童の行動を目にしますね。当たり前というか。誰に教わったという訳でもないくらい伝統的な文化として定着しているといったところでしょうか。

安全な交通行動文化の継承

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

私も、この交通行動の文化はとても良いと長年かんじてきましたが、当たり前のような文化も、時代と共に逆に壊れやすいということも最近感じ始めております。たとえば、繰り返しの訓練や指導などである時期に確固たる指導として児童生徒に教えている訳では無いのが実状なので、人々の他地域への流動、他地域からの流入が多い時代になればなるほど、これまでの良いお手本を示す人の総体が縮小すればするほど、どんどん、見習うべき対象が消失し、こういった文化が廃れてしまう怖さもあるように感じています。

センター事業部主任 宮澤：

そういう点では、ここのところ、JAF 自動車連盟さんが良いタイミングで信号のない横断歩道での歩行者に道を譲る車両数の各都道府県別の調査を公表して下さり始めたので、長野県の停止率が全国順位でトップという状況が分かり、実は長野県でもこれまでの好循環が崩れかけてきていたかもしれない風潮に歯止めがかかったということもあるかもしれませんね。やはり、褒められたということは、県民にとっても好循環を維持する動機になるでしょうから。

OSCN 所長 片山：

他県で学校教育現場を含めて交通安全教育指導に携わっていた私からしますと、やはり、長野県での貴団体 交通安全教育支援センターさんの存在は大きいと感じています。

それは、何故かという、県内全域を回られるような交通安全教育を研究実践されておられる組織は他県では極めて珍しいからです。そして、平成 14 年（2002 年）発足して以来、すでに、23 年にわたり、県内での学校教育現場や社会教育現場での交通安全教育指導に安定的に普及され続けてこられた。この効果や成果は、大変大きいと感じております。と申しますのも、数十年にわたり、長野県が本家ということもあり、定期的に通い続けておりますと、長野県の方々の交通行動にはいつも感動することが多いです。たとえば、車間をつめすぎないで適正な車間を心がけておられるドライバーが多いということや、横断歩道の少し手前を歩かれている歩行者に対しても、もしかしたら横断するかもしれないと並行して走行している自動車のドライバーが予測して停止するという交通行動を多く目にしてきたからです。

ただ、最近、懸念しているのは、近年の傾向として、長野県への他県からの移住者が多くなってくる、そうすると、この風土でのこれまでの望ましい交通行動の連鎖が、望ましくない交通習慣をもった交通参加者の行動により、マイナス方向へうすめられてしまうのではないかとことです。だからこそ、これまでより一層、交通安全教育支援センターさんや自動車販売店協会さん等の機関が、学校や社会教育現場での教育を推進していくことが必要だと感じております。

いまの、好循環の交通参加者の望ましい交通行動の好連鎖を失ってほしくないと思います。

センター熊谷理事長：

今年の春先のことでしたか、私が自動車学校近くの道路を車で通りかかった際に、横断歩道に高校生か大学生と思しき 3 人くらいの生徒さんがおられました。おそらく自動車学校に通っている

方々だと思います。私が、停止して道を譲ったところ、渡り終えて、一人の生徒さんが、くるっと振り返って深々と挨拶してくれたんですね。

私も、小学生児童や中学生の生徒さんからは、そのような行動をされることは多くありますが、「18歳くらいの大きな学生も、こんなふうに挨拶ができるんだなあ」と正直驚かされたんです。大人になってくると、はずかしくなったりしてなかなか出来ないと思うのですが、児童生徒の時に習慣化した行動が、大人になっても自然と行動に現れてくるのだなと感じました。また、こういう行動のできる若者たちが、免許をとって自動車を運転するようになると、自然と歩行者に道を譲れるドライバーに成長してくれるのだなと実感しました。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

私も、この自動車が止まってくれたら会釈などのあいさつをするという交通行動の文化はとても良いとおもいますし、感覚的に気持ち良い感じがしますよね。

交通安全という範疇でもそうですが、社会全体の風潮として気持ちよくお互いが生活できることにつながるという感じがしますよね。

OSCN 所長 片山：

長野県全体の近年の、児童生徒が巻き込まれるような事故の状況はどうですか？
例えば、歩行時とか自転車乗車時とか？

センター事業部主任 宮澤：

事故自体は減少傾向にはありますが、今年に限っては少し増加してしまったという状況ですね。以前は、低学年の児童側の飛び出しなど歩行時の交通行動が適正さを欠いて事故に遭うという傾向だったのが、ここ数年は、自動車側の交通違反がきっかけでの事故が増加している印象ですね。

低学年児童は、交通ルールを守っているのだけれども、事故に巻き込まれてしまうという状況が多いですね。ただし、自転車乗車時に関しては、圧倒的に自転車側の交通行動が適正さを欠いているという状況が多いのは、かなり前からその傾向が変わらないですね。歩行時の事故については、1年生がダントツで、3年生や5年生にも多く見られますね。

そして、学年のカラーと言うのでしょうか、例えば、1年生の時に事故が多かった学年は、進級しても事故が多いという傾向がありますね。一概に、毎年、3年生という学年が事故に巻き込まれることが多くなるというわけでは無いという印象です。発達段階でというよりは、たまたまその学年の児童の特性が事故に巻き込まれることが多い学年といった具合に。もちろん、その年の児童が、その後いつまでも事故が多いという訳ではないどこかで落ち着くのですが、指導者側の視点統計をとってみると、そんな状況が見えてきます。先生方に伺っても、例えば「今年のこの学年は落ち着きがない」といったような印象をお持ちの場合があるじゃないですか。そういった傾向がある特定の時期の児童の集団に現れるのがやはり不思議ですね。

センターと学校教育現場の連携 課題と指導上の工夫

OSCN 所長 片山：

さて、学校教育現場（小中校）との交通安全教育に関する連携について伺いたいのですが、積極的な学校さんとそうでない学校さんと温度差は往々にしてあるように私自身がこれまでの学校教育現場を対象にした交通安全教育活動の中で感じてきましたが、その辺りは長野県では如何でしょうか？

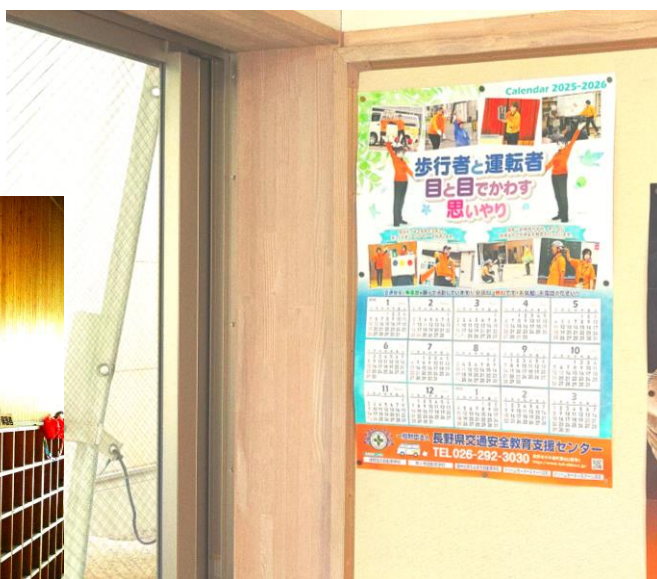
センター事業部主任 宮澤：

コロナ禍というのがひとつの転機だったように近年では感じております。コロナ禍の際には、学校さんからの交通安全教育の依頼が当然無くなった訳ですが、コロナ禍が小康状態となり、児童生徒の活動が再び活発化した際に、事故がやはり増加したという状況があります。これによって、再び、学校教育現場からの依頼が復活したということはあります。

例えば、去年は支援センターの交通安全教育を子どもたちが受けたが、今年実施しなかったら事故が増えた、だから、ぜひ実施して欲しいという声がありました。やはり、交通安全教育を学校教育現場向けに実施する意義は高いなと感じておりますし、コロナ禍中は、実施する学校さんではリモート授業という形態を実施することが多かったですが、リモートよりも生の声と実地で子どもたちに教えた方が効果が高い、伝わり方が違うなと実感しているところです。

もちろん、コロナ禍を境にして、依頼がストップしてしまった学校さんもありますし、学校教育現場の指導内容増加もあるのでしょうか、交通安全教育に割く時間が取れないという理由で、依頼がこなくなってしまった学校さんもあります。また、DVDを見せるのみとされた学校さんもあるようです。全体的な依頼の増減としては、コロナ禍を境にしても、長野県内では、決して減少してはいないといったところでしょうか。

中塩田小の廊下に掲示されている長野県交通安全教育支援センター作成の標語（県内小学生より募集）やカレンダーによる交通安全啓発ポスター。県内全域の学校教育現場に配布されている。



歩行者と運転者
目と目でかわす
思いやり

あわてずに いちど止まって みぎひだり

センター熊谷理事長：

令和5年度、長野県内に公立小学校が351校ある中で、私どもセンターが、その中の約51%の179校に交通安全教育で訪問しています。複数回伺う小学校さんもあるので、授業数は300弱位を実施させて頂いております。

センター事業部主任 宮澤：

学校によっては、リモートの方が児童生徒の集中が途切れないのでそれをお願いしますと言われる学校さんもありますが、指導者の私どもからすれば実地で対面式の生で子どもたちに交通安全教育について伝える機会がある方が、より伝わったり、子どもたちの疑問や質問の反応の音が聞こえるのでその声に指導員が反応してフォローするなど授業が深まりをみせたりするというような効果が高まる傾向はあるように感じています。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

やはりそうですね。私たち学校教員も、授業の中で、子どもたちのリアクションを見ながら、ああこの内容については少しゆっくりと説明しないと伝わっていないようだとか、こっちの内容は少し飛ばし気味でも理解できそうだとか、反応次第で授業への子どもたちの理解状況を確認しつつ授業を展開しています。

センター事業部主任 宮澤：

やはり、私たちも、子どもたちの多様な性質に合わせるようにしています。例えば、聞くだけで理解が深まる子どもと、聞いているだけではだめで実際に具体物を見て理解できる子どもと、様々だと思います。ですから指導員は言葉での説明と視覚的な具体物を必ずセットにしています。

指導員の喋っている内容が、後ろのパネルで具体的視覚的に、目で見えて理解できるようになっているというように、両方の手立てを用いて児童への理解を助けるようにしています。

言葉で喋っている内容というのは、一瞬でも子どもたちの集中が途切れ聞き逃してしまえば、次の言葉を聞いても何のことか分からなくなってしまうことがありますよね。ですからそれを補うためにパネル等の具体物があることによって、集中が途切れやすく下を向いて手遊びしてしまいがちなような子どもの注意も惹き付けることができますと思います。

その結果、具体物としての教材が手作りも含めて、どんどん増えていくことになってしまっており、ます。こういった部分が、私どもが指導上で心がけているポイントですね。

OSCN 所長 片山：

つくづく、お話をお伺いして、改めて共感すると共に、感動を覚えました。

指導する対象の児童や生徒に分かるような言葉や具体物で、工夫されて日々ご指導や、授業を構築されておられるお話やご指導の動画を拝見して、学校教員同様のプロの指導者の方々だなとの思いを強くしています。私が学校現場で教員として、警察官の方々に行って頂く交通や防犯等の講話を拝見しますと、時折、小学生の児童が理解できない言葉や難しい言い回しでお話をされている場面に遭遇します。日々、発達段階に応じた指導を心がけている学校教育現場からすれば、せっきくの講話の時間が、児童にとっては「難しいお話、理解できないお話」に終始してしまう場合がございます。これでは、せっきくの貴重なお話の機会がとてももったいないわけです。

この点からも、貴センター様のような、交通安全教育のプロの指導者の存在は、大変重要な意味があると思います。指導のプロフェッショナルな機関は、交通安全教育においても、この国に絶対に必要だなと感じておる次第です。

センター事業部主任 宮澤：

日々、私たちは、「どうやったら伝わるのだろう、どのようにしたら印象に残るのだろう」ということを念頭において指導にあたっております。それが、今の指導スタイルに繋がっているように思います。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

子どもを惹き付ける技が大事だと思うのですが、センターの皆さんは、対面での授業を繰り返していращやるので、子どもたちのリアクションを捉えながら授業を展開されておられるという点で、学校教育現場の私たちにとっても大変勉強になるお話です。子どもの興味を喚起するために、どんな工夫や手立てが必要か、という点を常に考えておられるのですね。大事なことと共感します。そして、子どもたちが事故に遭うパターンを理解していない、という点が私には以前から気になっ

ていたところです。例えば、見通しの悪い場所から飛び出せばどうなるか、自転車で車道側に広がって走ればどうなるか、といったように、どの様な時に事故に遭遇するかというパターンを学ばせるだけでも、効果的だと思います。そのような、分かりやすい教材なども、ぜひご紹介頂ければ助かります。

児童の交通行動の動画から

OSCN 所長 片山：

さて、ここで、私のマイカーの車載カメラに記録された、中塩田小学校周辺での児童の安全行動と危険行動の最近の動画を2つご覧頂きたいです。1つは、小学校近くで信号の無い横断歩道交差点での児童の的確な安全確認動作が記録された動画。そして、もう1つは、住宅街での自転車乗車中児童が見通しの悪いT字路から安全確認せずに飛び出してきた状況の動画です。どちらも、ほぼ間違いなく私どもの小学校の児童の交通行動の様子です。



センター熊谷理事長とセンター宮澤事業部主任と、OSCN 片山による最近の児童の交通行動の様子の動画確認と意見交換の様子

センター事業部主任 宮澤：

動画を見せて頂いて、信号の無い横断歩道での児童の、しっかり止まって安全確認をする様子、両方向から向かってくる自動車の動きをよく見えていますね。

OSCN 所長 片山：

そうなのです。安全に道路を横断する為の交通行動が、この地域の小学生児童に定着している様子に、数年前から感動を覚えており、3年程前に、以前の校長先生にお話を伺いに行ったことがあります。「どのような教育の成果で、こういった的確な安全確認行動をとれる児童が育つのでしょうか？」と。

一方で、最近、自転車に乗っている児童の危険な交通行動に出遭うことがあります。

2番目の動画の様子です。小学校低学年くらいの児童が、見通しの悪い道路から自転車に乗ってスーッと安全確認もせずに止まらずに飛び出してきました。その子を追いかけるようにして、次の児童も私の車の存在にも気づかずスーッと続けざまに飛び出してくる。あとから、お兄さんと思われる児童が、飛び出したことに気づいたのか、注意しに後ろから追いかけてきたという具合です。もしも、私の位置にいる車が、1台目の自転車が通過したからもう来ないだろうと考えて、減速やもしかしたら出てくるかもしれないという予測も立てずに進行していたら・・・自転車の児童に衝突することになる訳です。

センター事業部主任 宮澤：

たしかに動画を見せて頂いて、驚きを隠せない死亡事故にもつながるような状況ですね。以前、長野市や塩尻市でも、この動画と同じような状況で、自転車乗車中の児童が、死亡事故に至ったケースがあります。ひとつは、見せて頂いた動画の状況と同様に、前を行く児童の自転車を追いかけて交差道路に出てしまった二人目のお子さんが自動車と衝突して命を落としています。

センター熊谷理事長：

国道の幅広のような道路でも、道路横断時の危険性を忘れてしまうのでしょうか。長野市内の国道における事故は友達の家遊びに行き夕方に帰る時、細い坂道の下り坂の坂道をスーッと自転車で進行してノンストップで交差点内に進入して左から来た自動車に跳ねられたという状況で発生した。交差点のすぐ先にはその児童の家がある状況です。決して、見通しの悪いような交差点ではありませんでした。

センター事業部主任 宮澤：

友だちと一緒にいるときは危険に対する意識が薄れてしまうのですかね。細く急な坂道から自転車で国道に出る際に、ある程度は児童からも前の国道の様子が見える筈なのですが、目の錯覚もあるのでしょうか、飛び出してしまった。ただ、目の前の道路は国道ですし、交通量も多い時間帯だとは思いますが。残念ながら、こういった普通では考えられないような状況下でも、児童が飛び出して命を落とすパターンが見受けられます。

OSCN 所長 片山：

さて、もう一つ、愛知県のニュースで流された自転車乗車中の小学生児童の危うく一命をとりとめた交通状況動画をご覧ください。車道から一段少しだけ上がったところにある歩道を自転車に乗車して通行していた小学生高学年くらいの児童3名の危うく大事故という動画です。

まん中の小学生1名が、歩道上の左端に設置されているカーブミラーの支柱にハンドルの端が接触し、ふられた状態で車道側に突然飛び出してしまいます。車載カメラの運転手さんは、「あぶない！」という驚嘆の声と共に、ブレーキを踏みハンドルを切って対向車線側に少しはみ出し、児童との接触を避けることができた場面の映像です。児童は、車線の真中まで一気に飛び出している訳ですから、目前で回避できたドライバーさんが、もしも、もっとスピードを出していたら、或いは、よそ見をしていれば、確実に衝突してしまうような状況です。また、対向車線の自動車がたまたま速度もゆっくりで車間が空いていたので回避することができたわけです。いずれにせよ、児童が突然飛び出したことにこの状況での危険が生じたということになります。

では、なぜ、児童は自転車のコントロールを失い、飛び出す結果となったのかという点が重要です。現行の道路交通法であれば、小学生の児童が混んでいて路側帯の狭いような車道を避けて、安全な歩道を通行するのは問題が無く、この場合は、幅の狭い歩道上にあるカーブミラーの支柱の出っ張りが要因の一つであります。そして、次に重要なのは、児童が運転している自転車のサイズなのです。身体に対して明らかに大きめのクロスバイクというタイプの自転車に乗車しています。手も足も伸びきったような状態で運転する状況であり、外部からの衝撃を手足の長さで上手く吸収してふらつきを修正することができづらい。つまり、ハンドルの端が少しぶつかっただけでも、一気に自転車の向きが変わってしまい、軌道修正ができないという訳です。また、こういった状態で自転車に乗車していると、右左右や後方の確認も身体が回しにくく難しくなります。

如何に身体に合った自転車に乗ることが重要なのかということが分かります。経済的な判断から、子どもの成長著しい時期にあって、親が大きめのサイズを子どもに買い与える事情は理解出来ますが、やはり、児童が危険な状況に巻き込まれてしまうようではいけない。また、大人が指導して、

バランスの悪くなりそうな狭い道では、自転車から降りて押すなどの教育を児童に施す必要もあるといえそうです。実は、この前にお見せした小学生低学年児童の自転車乗車時の動画でも、その児童は、身体に合っていない大きめの自転車に乗っていました。安全確認をする為の身体的な余裕は無いということになります。

いずれにしても、親に対しても、児童生徒に対しても、自転車の安全な乗車について、より具体的な教育がこの日本では必要であると思います。現状は、自転車を買って与えるだけで、十分な教育がなされていないというのがわが国日本の多くの現状だと思いますので。

センター事業部主任 宮澤：

確かに、低学年の時に中高学年用の自転車を買ったり、高学年になると中学生でも乗れる自転車を大きめでも買ったりと、そうする保護者がいるのは事実ですね。
なるほど本当に危険ですね。

保護者への交通安全啓発の重要性

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

全く同感です。親御さん自身も、自転車という乗り物が自分の子どもの身体に合っていることが安全上とても重要であるということをよく理解していない状況もあるような気がしますね。なぜ、身体に合っていないことが危険を招くのかということ、自分の子どもの身体に買い与えた自転車が果たして合っているのか、という点は、理解されていないように感じます。とりあえず、子どもが自転車に乗れるようになりさえすればよいというような意識があるような気がしますね。

センター事業部主任 宮澤：

長野県では、小学校3年生以上から一人で自転車に乗っても良いという地域や、3年生以上から自転車に乗って移動しても良い範囲が広がるといった取り決めのあるような地域も多いので、その準備として、学校での親子レクの際に自転車教室を親子で受講するという学校さんもあります。

OSCN 宮澤（中塩田小校長）：

交通安全や自転車の安全利用も含めて、親御さんへの知識再確認の啓発活動もとても大切だと思いますね。自転車を運転するという状況は、小学生にあっては、学校外での行為となりますし、親御さん自身の意識や知識に委ねられるところが多くなってしまうのが実状です。学校では、声かけや指導は出来たとしても、家庭に戻れば、親御さんの判断に委ねられてしまう部分ですから。

センター事業部主任 宮澤：

そうですね。講習をするために学校さんをまわっていると、結構、保護者や大人の方々が、自転車の道路交通法規やヘルメットの重要性などを知らなかったという声もよく耳にします。その際に、保険の重要性についてもお伝えしています。

3年生対象の親子レクでの交通安全教室は、こういった意味でも、啓発効果が高いと感じています。

OSCN 所長 片山：

私どものOSCNでも、12年間の愛知県での交通安全教育活動の中で、親への啓発活動を「親子で体験！じてんしゃスクール」として行ってきました。まったく、今出たようなお話の意図と同

じです。また、親への啓発活動と同時に、大切だなと感じて取り組んできたのが、学校の教員向けの教職員研修活動です。例えば、先生自ら、校区での歩行や自転車の安全な交通行動を再確認して頂くような活動です。その為の一つの手立てとして、先生方に動画に出演して頂き、校区での安全な交通行動の模範動画を制作するというものがあります。子どもたちにとって、交通行動上の危険箇所や事故初声ポイントなどを先生方へのヒアリングや所轄警察署の事故データから抽出し、そういった場所で、どのような交通行動が望ましいかを子ども役になって演じてもらいます。交通安全教室の際に、児童に考えさせつつ、制作した模範動画を見て学んでもらう訳です。このような先生方との交通安全行動の動画づくりを通じて、先生方自身が自転車の安全運転上の決まりやなぜそうなのか意味を知らなかったことに気づかされたという感想もよく耳にします。そして、教室の際に、児童にその動画を見せると、先生自身が身近な校区内で自転車に乗ったり、歩行者になったりして、安全行動の模範をしているので、子どもたちは興味津々で食い入るように先生方の行動の一部始終を見ています。教育効果が高いと感じています。日常、自分たちの住む校区で、先生が自転車に乗っている姿を目にしない昨今ですので。

先生方自身も、撮影のために初めて校区で自転車に乗ったりすると、普段気づかなかったような校区の交通状況や、その校区で自転車を運転する時に注意するポイントなどに気づかされるようです。保護者や小学校現場の先生方が歩行や自転車の安全行動の内容を理解していなければ日々の生活の中で子どもたちに伝わり様が無いと思うのです。昨年の7月に愛知県長久手市の小学校での動画をご覧ください。

センター事業部主任 宮澤：

保護者の方々や大人にまずは再勉強してもらいたいという点に共感します。長野県でも、2019年に「長野県自転車の安全で快適な利用に関する条例」が制定されて以降、小学校や中学校を中心に展開されている自転車の安全利用教室を、保育園等でもできないかというような声も聞かれたことがあります。しかし、園児用の自転車を用意することもハードルが高い訳ですが、それ以上に、基本的には交通安全教室を時間が限られた中で行い、一定の教育効果を高めるためには、保育園の段階では、歩行者としての教育が優先ではないだろうかという結論に至りました。発達段階から検討しても、保育園の段階では、自転車教室は時期尚早ではないかということになり、ただし、保護者の方々に対しては、自転車の安全利用についてのお話を伝える機会が必要だろうと感じました。しかし、なかなか現場の先生方から保護者の方々に向けてそのようなお話の機会を創って頂くことは難しかったです。

現状、保育園に登園する際に、専用の幼児用座席のあるこども乗せ自転車では無く、ママチャリの荷台に子どもを乗せて二人乗りの法規上違反の状態、危険な状態で登園される保護者の方もおられるし、時には、園児自ら自転車に跨った状態で登園されるような状況もあり、こういった危険な行為は、保育園の先生方からも指導や注意をして頂きたいと考えています。こういった状況を踏まえすと、やはり、幼稚園保育園の段階から、その保護者の方々に対しての交通安全教育上のお話を聞いていただく機会が増えるといいなと思います。また、教育現場でお話をさせて頂くと、先生方が、自転車の乗り方や道路交通法など交通安全上のことで、「そういう意味があったのですね。本当に知らなかった。学ぶ機会が有って良かった」という声もよく耳にします。長野県で教職員向けに、毎年1回7月から8月辺りに県の教育委員会保健厚生課主催で塩尻の総合教育センターで開催される「学校安全講習会」では、私たちセンターも小・中・高と発達段階毎の分科会での各1時間分の講義をさせて頂くのですが、その際に、交通安全上の大事なポイントを先生方にお伝えする機会があり、とても貴重な機会だと考えております。ただ、近年、参加される先生方の数が年々減る傾向にあるようで、残念に感じております。また、先生方への啓発機会を増やすという意味で、以前は、各学校さんへ県の交通安全教育指針に基づいて、交通安

全上の指導ポイントや自転車安全点検カード等をメール配信させて頂いたりしたこともございます。現場では、大量のメールや教育関連情報が交錯する中で、私どものメールもご覧頂けてない状況もあったようで、少々歯がゆいところではありました。学校の教育現場も社会や家庭の様々な状況を抱えて大変な状況下に置かれている昨今と存じ上げていますが、やはり、児童生徒の命に関わる教育は風化させてはならないと考え、今後も、保護者の方々や先生方のお役に立てればと、交通安全教育の支援を県の教育委員会との連携をとりながら進めていきたいと考えております。

OSCN 所長 片山・顧問 宮澤（中塩田小校長）： いろいろと貴重なお話をありがとうございます。

今後の交通安全教育実践研究の参考になりました。今後とも、長野県民の為に、様々な形態での交通安全教育の支援を何卒よろしくお願い申し上げます。

この会談の後で、センター様で考案開発された様々な教材について、ご紹介頂きました。

視覚的に理解しやすい交通安全教育教材



センターでは、工夫した教材を用いて、視覚的に分かりやすく理解しやすい、交通安全教育を心がけられます。

（左上）交差点で生じる事故の典型を示す為の説明版

（右上）縁石で遊ぶことの危険性説明用の軽量な模擬縁石

（左下）シートベルト未装着の危険性を一目瞭然で示す機材

（右下）簡単に持ち運び可能で信号の色の説明用の歩行者用信号機

